何故、絶対非武装なのか？
（その3）
――「日本に自衛力は必要ではないのか？」という問いに答えて――

意見広告運動の事務局スタッフのSさんからの問題提起にこたえて、本誌では昨年12月の第93号以降、この「何故、絶対非武装なのか？」という特集を続けてきました。この企画は好評で、継続掲載の希望が多く、今号でも、会の内外の方から、「自衛隊はなぜいらないのか」についてのご意見を書いていただきました。ご感想をお聞かせください。また、この問題についての疑問、反論などもお寄せください。（編集部）

【お答え・その9】

非武装こそ生きる道

石川逸子

今年九十三歳になった大阪のいまい・げんじさんが『片雲の記』を上梓された。一片の赤紙によって召集された、いまいさんは、シベリアに抑留され、九十すぎた今でも飢餓地獄、重労働地獄、冷感地獄だったシベリアの夢を見てうなされるという。

徴兵・抑留生活あわせて六年、やっと帰郷してきたいまいさんが、国から受け取ったのは、後にも先にも二千百五十円だけ。留守家族にもなんの援護もないまま、苦労したいまいさんの妻は「うちは天皇に大きな貸しがありますんや」と言っている。

戦後の政府も、不法な抑留に対して、ソ連に一言の要求も抗議もしていないことを知り、いまいさんは考える。〈国民にとって国家とは何だったのか〉と。

軍隊が民間人を守るどころか、わが身の安全のためには銃をもたないひとびとを遺棄しあるいは殺しさえすることを、中国東北部（旧「満州」）で、沖縄戦で、私たちは骨身にしみて学んだはずだ。

戦後でも、自衛艦「なだしお」は、釣り船と衝突したとき、海に放り出されたひとびとを救助せず、見殺しにした。艦の損傷をしらべることだけ大事だったのである。

つい最近では、武装グループに捕らわれ、「すみません」と詫びつつ必死に助けをもとめる青年の映像を見ながら、ただちに「自衛隊は撤退しません」とつめたく言い放ち、見殺しにしたこの国の首相を、私たちは目にしたばかりである。

国は、どこかに軍隊をくりだすときには、決して本音をいわない。「資源をぶんどりたい」「大いに威を張りたい」「一部の大企業のもうけになる」などとは言わず、「在留邦人保護」のためとか、「人道援助」「自由」のためだと、もっともらしいことをいう。

何千万人のアジアのひとびとをいわれなく殺戮した（日本人もまた多く死んだ）アジア・太平洋戦争でさえ、「東洋平和」のためという触れ込みであった。小学生である私などは、アジアの悪人たちをやっつける「聖戦」であり、その妨げをする米英と戦っているのだ、と他愛なく信じこんでいたのだった。

日本軍にふいにふみこまれ、家族全員を殺されてただ一人、生き残ったフィリッピンのアスセナ・オカンポさんは、言われた。

「戦争からはなにもいいものは生まれ

ません。戦争か平和かという選択をせまられたときに、必ず平和を選びとらねばなりません」

武器をもっていれば必ず使いたくなる。使うということは残忍に人を殺すということだ。

非武装こそ人間が生き残る道なのだ。

雪害対策、台風対策、第三世界の飢え病んでいる子どもたちへの対策、殺人のために使う金などどこにあるというのだろう。

（いしかわ・いっこ、詩人、本会会員）

【お答え・その10】軍隊のような自衛隊はいらない

大木晴子

私は、各地で大きな地震や災害が起きると「自衛隊が直ぐに行けばたくさんの命が助かるのに！」と出足の遅さに腹をたてている。だが、その後で何時も「何か変だなぁー」と思う。

二〇〇三年二月から始めた新宿西口反戦意思表示は四年目に入り、これまでに沢山の人たちと向き合ってきました。

時々、「他国から攻められたらどうするの」と自衛隊が必要だと言う人たちと話をします。私が持つ〝戦争に繋がる基地はいらない〟というプラカードを見て「アメリカがいなくなったら誰が日本をまもるの」「強い自衛隊がいれば敵は攻めて来ないでしょう」と言う。この人たちは、はじめから相手の国を敵と考えている。私は哀れだなぁーと思う。

何故、仲良く手を繋ぎ合って生きていくことを考えないのだろうか。その為に何が出来るか……考えることがないのだろうか。

日本には、憲法九条という素晴らしい決まりがあるのに……。胸を張り、この平和憲法を堂々と世界の国ぐに、に大きな、大きなプラカードにして意思表示すれば良いのにと何時も思う。きっと、それを見た多くの国ぐには手を繋ぎ、そして平和への歩みが出来るのではないだろうか。

私は夢のように思い描いている。憲法九条を掲げてどんな眼差しにも揺るがない国のトップがいる。「もう、絶対に戦争という愚かなことが繰り返さない国なんだ！」と信じられる。その時まで「軍隊のような自衛隊員」だった人たちは武器など持たず今までに培ってきた技術を活かして「命を守る」ことに力を注ぐ……これが、現実になったら私の「何か変だなぁー」と思う気持ちが晴れるのに!!

（おおき・せいこ、「明日も晴れー大木晴子のページ」で反戦意思表示、本会会員）

【お答え・その11】広島の出身者として考える

楠田泰子

故郷広島を離れて3年になります。祖母も父も被爆者です。原爆投下に広島が選ばれた理由について、都市の大きさや山に囲まれた地形が原爆の破壊力を探るのに適していた、広島には軍隊、軍事施設、軍需工場が集中していた、この2点が挙げられています。1943年には、当時の広島市の面積の約10％を軍関係の施設が占めていたということですから、まさに「軍都」だったと推測できます。

しかし、その一方で広島市民は軍に守られていたかというと首をかしげます。被爆者談では「いつも警戒警報、空襲警報が発令になるとそのたびに防空壕へ避難した」「学校で竹槍を持たされ訓練させられた」と聞きますし、また大事な家族を徴兵に取られることは当然に行われていたのですから、守られるどころか、自分の身は自分で守らなければならなかったこと、そして個人の命を捧げることを「お国のため」という理不尽な理由で強要されていたことは明確です。

上京して初めて参加したデモは自衛隊監視テント村主催のデモです。集会場を出発し住宅街を抜け、立川駅前、商店街

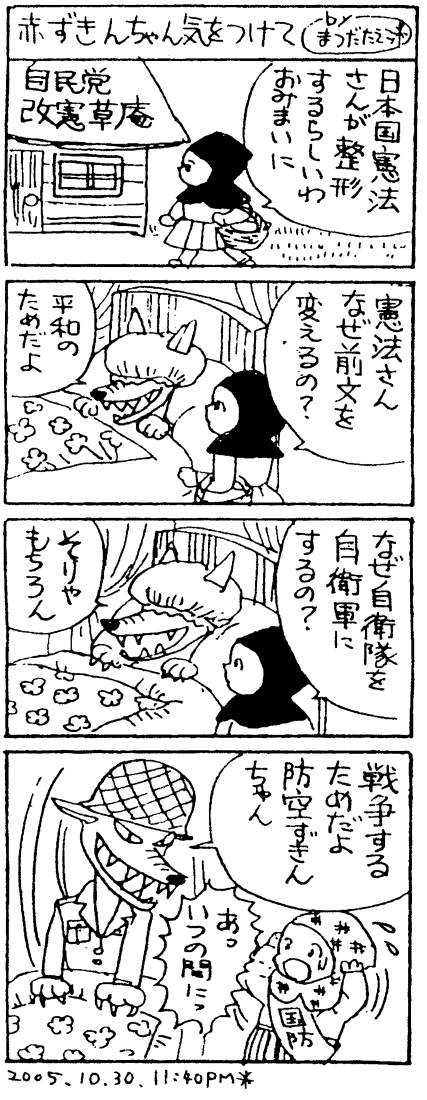
を通り陸上自衛隊立川駐屯地（東京・立川市）に申し入れするコース。市民の日常生活圏内に駐屯地が存在していることに驚くと同時に初めて間近に見る軍人そのものの自衛官に違和感と恐怖を覚えました。

仮に日本が侵略されることを想定したとき、自衛隊がどのように自分たちを保護してくれるのか全く想像がつきません。住宅地、駅前を自衛隊が保有する戦車が通り、銃を持って敵と闘ってくれるのでしょうか？　それは戦争状態であって自衛ではありません。

平和憲法と自衛権との関係性について考えるとき、国際平和を念頭に議論していくこと、そして自衛隊の存在が自分たちの日常の延長上にあることを意識していくことの必要性を感じています。PKO協力、災害派遣、国民保護という言葉を名目に、戦争へ繋がる、加担する構造は、私たちの「日常」に存在しています。そういった自衛隊の存在や武装が正当化される思想、また能力主義の一端として市民に自衛のための武装を強要される作風に対しては「絶対、非武装」という主張をもって対抗していきたいと考えています。

「（8月6日のことは）思い出さないようにしているけど、忘れないようにしている」これは私が忘れることができない被爆者の言葉です。四世代先のことを考え行動するとき、自衛隊は本当に必要でしょうか？　武装することが平和への道でしょうか？

（くすだ・やすこ、会社員、28歳）



（まつだたえこ「赤ずきんちゃん気をつけて」、姫路「街頭興行」発行の『平和街角かわら版』6号より）

【お答え・その12】一人の「大勇」から

澤地久枝

服部英二・鶴見和子両氏の新著『「対話」の文化――言語・宗教・文明』（藤原書店）から、刺激的示唆、知恵と勇気を与えられた。武力紛争や戦争から解放されるべく、発想の転換が求められている。殺しあいではなく、対話によって開かれる時代が、私たちの求める問いへの回答と思う。中で鶴見さんの語っている話は心に深くしみとおった。

ベトナム戦争中、ベ平連は脱走米兵を助け、鶴見さんもその一人を泊めた。その米兵は、負傷した上官を担いで友軍陣地へ帰ろうと歩いていて、ベトコン（ベトナム解放戦線兵士）と至近距離で出会う。撃ち殺されると思ってベトコンを見た。相手も彼を見、黒人であると認めると、急に向こうをむいて行ってしまった。助けられたのだ。彼はふたたび彼らを殺すことはできないと考え、脱走したという。言葉を介さずに心は通じ、「対話」は成立した。

「敵」が攻めてきたらどうするか？　と悩むよりも、殺さず、殺せしめず、互いに生きのびることが可能だった具体的事例を把握したい。未来への新しい発想を

守り育てる希望の種子として。

米国は世界一の軍事力をもち、GNP（国民総生産）の6％を軍事費が占める。日本の防衛費が1％であることに、駐日米大使は最近の講演で異議を述べた。

在日米軍再編成のため、米軍基地は強化されようとしている。自衛隊が米軍の同盟軍たるべく、憲法第九条が障害になると米高官が発言する事態。憲法、特に第九条を抹消しようとする政治の背後には、この米国の意図がある。

周辺諸国にとって、日米「同盟軍」は軍事的脅威であり、軍事衝突を惹起する方向へむかわせる挑発たり得る。平和へ、ではなく、戦争への道である。

「見えない敵」の攻撃を恐れるより、各国との共存、平和維持のため、対話の局面を開き確保すること。それが日本のとるべき政策であり、最終的に決定の鍵は実権者にある。「個」として自立し、志ある市民が一人でもふえること、その緊急の必要性を思う。

沖縄駐留米海兵隊のグアム移駐費用約1億ドル。日本はその75％の負担を要求されている。アメリカの「新安全保障戦略」は、日米の緊密な協調をうたい、中国の軍備拡張に警告を発する。名分を失ったイラク先制攻撃に懲りることなく、先制行動の持続を戦略にふくめている。

米軍に基地を提供し、財政負担要求に応じ、さらに自衛隊を同盟軍化し、血を流させる。ブッシュ政権が望み、小泉内閣が追随する現状は、日本が次の武力紛争の当事国となる方向を示していよう。攻められるのではなく、米軍主導で攻めてゆくことになる。

敗戦から六十年余。勝者であっても、米国に日本を隷属させる権限はない。私たちは十五年戦争の痛切な体験を土台として、一人の戦死者も出さず、日本人により戦死させられた一人の他国人も出さない戦後を生きてきた。侵さず侵されず、殺さず殺させない歴史をつづけたい。その最大の支え、保証として憲法は存在しているのだ。日米安保条約はまったく時代遅れと思う。

憲法前文の理念、九条一、二項の原点に戻る日本を、どの国が攻めてこようか。いっせいに銃の引金から指を離し、すべての武器を封印、異なる文化、信仰、思想それぞれの共生を目ざす。夢物語にはできない。他者への愛と寛容は自らをも救うのだ。よりよい地球を未来に引きつぐべく、他に道があるだろうか。

「朝日歌壇」で見た一首が長く心にある。

「人を殺すくらいなら撃たれ死ぬという子は体育教師に愛されざりき」　愛されなかった「少年」がいとしい。私は少年と同じ地平に立つ。憎悪に対する憎悪、復讐に復讐、死には死。この負の因果関係を終わらせる大勇。その決断をするのは、私たち一人ひとり。そして、一人は一人ではない。

（さわち・ひさえ、作家、本会会員）

【お答え・その13】
何故絶対非武装か
〝グレー〟の日本

高橋建吉

『ニュース』93号・94号では先輩方が複数の異なる視点から「絶対非武装」について論じられておられ、私も多くの意見に賛同・共感している。それをご理解いただいた上で、この拙稿に目を通していただきたいと願う。

私は、「絶対非武装」を目指すべき国際社会全体の目標であると考える一方で、いますぐに日本が絶対非武装を成し遂げるべきであるとは主張しない。そのため、与えられたテーマからは少し離れてしまうが、ここでは「絶対非武装」に関わる雑感を述べる。

戦後、日本が絶対非武装に限りなく近い憲法を持ったのは、日本が進んで武力放棄を志向したのではなく、アメリカをはじめとする国際社会が日本に課した再出発の条件だったからである。その後、端的に言えばアメリカのオーダーによっ

て再軍備が進み、現在の自衛隊海外派遣や改憲論議を生み出した。私は、自衛隊の存在が違憲か合憲か、といえば「間違いなく違憲」であると判断する。しかし、組織としての自衛隊を潰し、絶対非武装を即座に実現しようとは言わない。それはなぜか。

その理由のひとつは、今日の世界があまりに戦争と武器と憎しみに溢れているからである。アフガニスタンの戦後復興に介入した日本は、兵士の武装解除を行なうために、結局は国連等の武力と経済力を後ろ盾にして武装集団との交渉を行ない、その結果、結構な成果を収めたという。その事実を知ったとき、私は悲痛な思いを抱いた。しかし、その現実はアフガンのみならず国際社会全体に通じるものだと思う。暴走するアメリカが世界の秩序を規定し、それに抗う者が排除される今日、「曖昧さ」の中でうまく世渡りしてきた日本は、その特性を多くの場面で平和的に利用できるはずだ。だが、グレーとしての日本が国際社会で最低限の信頼を維持し、その役割を果たすためには現憲法を手放すことはできない。

もうひとつ気になっていることを挙げると、「もし他国が攻めてきたら……」という仮定を出発点に展開される軍国化理論についてである。そうした理論の多くは、中国か北朝鮮を想定して組み立てられることが多いが、しかし、中国や北朝鮮が日本を攻撃する可能性が現時点で現実的にあるだろうか。もちろん全くあり得ないとは言い切れないが、確度の低いこの理論を日本の軍国化を正当化するために利用する人々には非常に強い疑問を持つ。日本は、そんな仮説を立てて他国を刺激する前に、未だに公式的に解決していない北朝鮮との戦後補償問題を早急に清算し、「（首相の）靖国参拝は個人の心の問題」であると公言する首相を交代させ、東アジア地域でまともな外交が行なえる環境整備を進めるべきである。

最後に、日本が絶対非武装を選び取るために目下必要だと考えていることを端的に述べる。まず、日本政府は二国間のパワーバランスで動いている外交から、多国間での外交交渉に依存して動く国際主義への回帰を志向すべきである。その転換のためには段階的な軍縮と歴史問題の清算が前提であり、近年それらの前提条件を乗り越えることが、より困難かつ重要なテーマとなっていると言える。一方、民間レベルではいわゆる「反日」と日本のナショナリズムとが衝突する今日の東アジア地域の尖った関係を、対話と自己批判によって乗り越える相互努力が必要であろう。尖った針も、よい意味で何度もぶつかり合えば相手を傷つける武器にはならない。尖った針を、少しずつ減らしていくしかない。

（たかはし・けんきち、大学院生、26歳、「BOOMERANG NET」）

（マンガ　まつだたえこ「近未来サスペンス」、姫路「街頭興行」発行の『平和街角かわら版』5号より）